

片野秀俊指揮による  
第2回

# Amici Del Canto = 146

146人の  
歌仲間たち

1986.2.11TUE  
YUBINCHOKIN  
HALL



●主催＝●登戸混声合唱団●女声合唱団コーロ・ファンタジア●ひびき混声合唱団●混声合唱団「四季」●男  
声合唱団「秀声会」●ルンビニー混声合唱団●女声合唱団こーろ・えれがんつあ●コーロ・ファミリエ合唱団



片野秀俊指揮による  
第2回 *Amici Del Canto* = 146 <146人の歌仲間たち>

1986年2月11日 郵便貯金ホール 12:00pm開場 12:30pm開演

ごあいさつ

片野秀俊

かすかにきらめきを秘めて  
細き小川生まれ 一閃の流星のごとくに  
小川 岩にしみ 小枝にはじけ……  
いつか魚を抱き 石をころがし  
光をたたえ 花を彩り  
ああ 美しき暖かき光の群れ達  
岸边にたわむれ よどみになお歌い  
ああ たくましき やさしき光の群れ達  
流れゆけ 流れゆけ 手をたずさえて  
胸はずませて 流れゆけ  
大いなる光の群れ達よ  
たゆとう光のさざめきの中で  
私は心おだやかに まどろんでいる

61年2月

この度の第2回「アミーチ・デル・カント=146」の演奏会を催すにあたり、女声合同演奏では、曲集「落葉松」他の作曲家として著名な、小林秀雄先生自ら、ピアノを弾いて下さることになりました。また、出演者全員による、混声合同演奏の「筑後川」では、作曲家 團伊玖磨先生に御指導を頂き、新進女流作曲家として活躍中の高嶋みどりさんの手による編曲で、2台のピアノ伴奏による「筑後川」を日本初演することになりました。團先生からは、この企画と編曲に格別のお喜びを頂くと同時に、「心より期待している」とのお言葉を頂戴致しました。これらの事は私にとりまして、身にあまる光栄でございます。本日は出演の全団員と共に精一杯音楽を楽しみたいと胸躍らせております。

ごあいさつ

アミーチ・デル・カント=146実行委員会

本日は、御多忙中にも拘らず、私共第2回アミーチ・デル・カント=146のジョイントコンサートに御来聴賜りまして一同心より感謝しております。第1回目より3年、146名の歌仲間は210名にまでなりました。3年毎の約束の今日、再び一堂に会することができ、歌えることは誠に嬉しいかぎりです。これからも歌の輪を大切に、成長し合いながら頑張っていきたいと思っております。

本日の演奏会を開催するにあたりまして、團伊玖磨先生、小林秀雄先生をはじめ、多くの皆様から暖かい御支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますと共に、今後とも御指導賜りますようお願い申し上げます

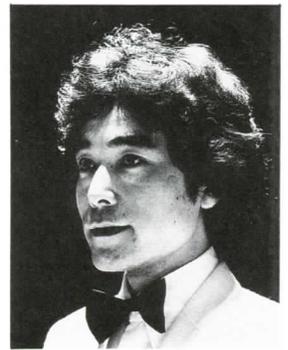
指揮●片野秀俊

昭和45年日本合唱協会（日唱）へ入団。Bass のソリストメンバーとして全国各地で演奏活動が続けると共に、オペラやリートのステージでも活躍。48年より Bass パートリーダー。53年から59年まで同協会、団内指揮者兼コンサートマスターを務める。一方アマチュア合唱団の育成にも力を注ぎ、各地の合唱団の常任指揮、講師講習を務めている。また邦楽、洋楽の室内アンサンブルの指揮も多く、一昨年は、東京ゾリステンのコンサートでモーツァルトを指揮して好評を得るなど、活動は、合唱部門に留まらない。

指揮法を、ヘルムート・リリング、山田一雄、荒谷俊治、諸氏に、声楽を下八川圭祐、天野秋雄、芳野靖夫、工藤博、諸氏に師事。日本演奏家連盟会員、日本合唱指揮者協会会員。

60年4月から日本合唱協会主宰となり、同時に正指揮者に就任している。

福島県いわき市出身。



作曲家・ピアノ●小林秀雄

東京生まれ。小学校より高校までを三重県伊勢市で過ごす。

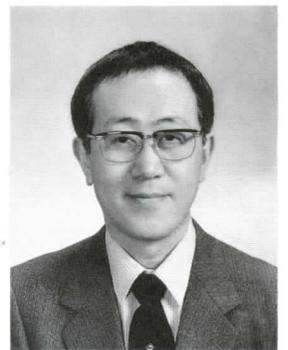
昭和30年、東京芸術大学作曲科卒業。同大学にて、作曲を故長谷川良夫氏、ピアノを水谷達夫氏、梶原完氏、故宅孝二氏に師事。

昭和34年、36年、NHK委嘱作品ラジオ音楽劇の2作が芸術祭奨励賞を受賞。この他に作品として2つの音楽劇、オペラ「紫のドレス」。合唱曲「まっかな秋」「落葉松」「火のくにのうた」他。歌曲「飛驒高原の早春」「日記帳」「瞳」他。器楽作品「オーケストラのための変奏曲」他。著書「合奏編曲法」他。それぞれ多数。

愛知県立芸術大学教授を経て、聖徳学園短期大学音楽科教授、東京芸術大学講師。

昭和54年に文部省在外研修生としてパリ留学。

新・波の会理事長。日本作曲家協議会会員。詩と音楽の会委員。



ピアノ●高屋浩子

東邦音楽大学ピアノ科卒業。第56回、64回定期演奏会出演。卒業代表演奏会出演。在学中より、ジョイントコンサート等に多々出演。声楽、器楽、合唱と数多くの伴奏を手がけている。宮島敏氏にピアノを師事。片柳英男氏に作曲を師事。



ピアノ●古川佳園

武蔵野音楽大学・音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。現在、合唱資料センター、日本パッハアカデミーなどのピアノ担当。また合唱団、ソリスト伴奏など幅広く活躍している。



ピアノ●和田令子

桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。小野田多江子、細川哲朗両氏に師事。

新日本交響楽団、東京ゾリステンとピアノコンチェルト協演。青少年コンサート、サロンコンサート等に出演。

ジョイントリサイタル数回開催。

声楽リサイタル、合唱等の伴奏ピアニストで活躍中。



ピアノ●長沢恵美子

東京音楽大学ピアノ科卒業。読売新聞主催第50回新人演奏会に出演、同大学研究科修了。「2台のピアノの為のコンサート」、「ジョイントリサイタル」、「ピアノ連弾の夕べ」、「スペイン音楽祭」等に数多く出演。'84年1月東京ゾリステンとモーツァルト作曲「2台のピアノのための協奏曲」を協演。菊池有恒、岩堀美知子、神野明、古村義尚各氏に師事。東京ピアノ・アンサンブル・グループ会員。日本スペイン歌の協会会員。



編曲●高嶋みどり

東京芸術大学作曲科卒、同大学院修了。山田一雄、間宮芳生、石橋真礼生、各氏に師事。

【主要合唱作品】

- 混声合唱組曲「愛のプロローグ」(カワイ出版)
- 男声合唱組曲「青いメッセージ」( " )
- かみさまへのてがみ(混声・男声)
- 混声合唱組曲「夢のなかで」
- 合唱オペラ「青春の十字架——ロミオとジュリエット」
- キャロルによるカノン——児童合唱と、ピアノ、オルガンのための
- 感傷的な二つの奏鳴曲

【主要作品】

- セレナード——月夜にふさわしい恋の物語
- Statue——ヴァイオリンとピアノのための
- ピアノ協奏曲
- 管弦楽のための悲歌

他



指揮者 山田一雄 《野獣はそう沢山いる筈はないのである》

片野秀俊くんはパッチリと可愛い眼をしている。また、しっとりと静かな落付きがいつもかれを支配している。口かずも多いとは言えないし、横平な感じとて一つとしてあるでなし……。

でもなぜか彼に感じるあの身近な魅力は、一体なになのだらうか……と。その人間の体系を一口に語るということはいかにむづかしいかということである。

秀俊のアノ黒々とした眼差しは、いつも内面に眼をむけて、つまり人間存在のあかしたる《問い》を絶えず求めているとしかわたしには思えてならないし、しっとりとした「真剣な静けさ」は本物の音楽の感動への準備の姿勢としか思えない。かれと酒を飲んでみるとそれがわかる。かれのそうした個性はますます具体的なものに感ぜられ、彼のその「よき孤独」こそは、彼の謙虚でしかも筋の通った高い見識のためだともわかってくる。きっと片野くんにはその内部のあらゆる面で、絶えず浄火のように勤い精神の対座がきびしくも秘められているに違いないとまで思う。

言い方を換えれば深いヒューマニティに魂を捧げ、高く、美しく、あのエジプトのような広大な自然さに求婚しつづけている心暖かい現代の野獣だとも言えるかもしれない。

さて、わたしのそうした直感は、片野くんの仕事の中でますます広がる一方だし、やがては片野トータルの魅力とまでなっている。そしてその磨きにみがかれた美意識——天分が多く仲間たちの中で、輝やく星のようなリーダー・シップとなってその空間を形成する。

つまり『日本合唱協会』をはじめ幾多のアマチュア合唱団たちを、「美しい悲しみ」で、「自由で新しい喜び」で揺ろうごかし又、包んでくれる。そんな季節が現在の片野秀俊くんなのだ。

世界中に、バーゲンの掘出し物みたいな合唱指揮者がウヨウヨ沢山居るという現状らしいが、彼ほどの立派なパーソナリティと選ばれた才能を光らせる指揮者はそう沢山はいない。『野獣』はそう沢山いる筈はないのである。

どうか本日の会が戦慄と緊迫の、はたまた甘美にして優美なコンサートであるよう、わたしは心から祈っています。

(1986・正月)



指揮者 荒谷俊治 《2つの興味——素敵なコンサートを期待しています》

片野さんに初めて会ったのは日唱の練習場であったと思う。にこやかな笑顔と眼の光りが印象的であった。何度か日唱とつき合う度に片野さんはリーダーとして大いに協力して下さいました。

片野さんは日唱の指揮者としてプロ合唱団の中心で活動する傍ら、アマチュアの合唱団や合奏団を指揮して多彩な活躍を続けて居られる。本日は氏の指導を受けている団体の中から8団体が集って第2回目のコンサートが開かれる。

作品は湯山、萩原、広瀬、小林、多田、池辺、團と敬愛する日本の代表的作曲家から、バッハ、シューベルト、フォーレまで、珠玉の作品がきらびやかに並んでいる。8つの合唱団が各々のレパートリーで歌うコンサート、それに女声や混声の合同演奏と盛沢山の内容である。

私の一番の興味は個性の違う作曲家の作品を片野さんの指揮はどう振り分け表現してみせるかと云うこと、これだけ多彩な作曲家が揃うと至難の業だとは思うけれど大いに興味をそそられる。

又、作曲のカミさまとも伴奏の神様とも異名を取った小林秀雄さんのピアノ特別出演も、もう一つの楽しみである。

御盛會を祈ります。



指揮者 村谷達也

片野秀俊さんの最近の活躍は、とくに目覚ましい。合唱コンクールでも、おかあさんコーラス大会でも、どんどん入賞している。私なんか彼より年齢が(多少)上だということだけで、彼を友人とと思っているから、そういう身近な友だちが、立派になっていくのはとても嬉しいのだ。こんどのコンサートはじつに多彩な楽しいプログラムビルディングだ。しかも小林秀雄氏のピアノ伴奏とはユニークな企画で、きっと歌うみなさんがたも、客席も、小林さんの作曲家のチミツでセンサイな情感と音楽力の魅力で、いつまでも心に残るひとときを過されることだろう。そして小林さんの音楽が合唱団の人たち、ひとりひとりの身体の中にしみこんで、これからの大きい糧になることだろう。そして、また、つぎの回には、ひとつの高いステップへと歩をすすめていく。

片野さんは日唱でも大活躍のひとだ。プロ合唱の世界もアマチュアの合唱の世界も、音楽はおなじだ。どうか、いい音楽を心をこめて、これからも指導を続けてほしい。

(25/Dec. 1985)



## 作曲家・全日本合唱連盟理事長 石井 歓

片野秀俊さんを中心にした第2回のアミーチ・デル・カントの演奏会が催されることを聞いて素晴らしいことだと思っている。そのプログラムを拝見すると、実に多彩である。参加するそれぞれの合唱団が、特徴のある団体で、きっと楽しい演奏会になることだと思っている。特に、女声合同演奏では、作曲家の小林秀雄さんが自らピアノを担当することを聞いて、これは素晴らしいぞ、と思う。なにしろ、小林秀雄さんのピアノは定評があり、音楽的で、美しい音色感は、わたくしも日頃、感心しているところである。きっと彼の作品の〈定形〉が生まれることを期待している。



## 作曲家 小林秀雄 《音楽は人々の心の広場》

片野秀俊さんは、よき師に巡り会い、本ものの修業を積まれ、つねに音楽の現実と向き合い、経験を重ねて来られた立派な音楽家だと思います。

私は、音楽とは人間の生命を輝かせるための、すばらしい精神文化だと思っています。最近の、この荒んだ世相を見るにつけ、音楽する我々が、プロ、アマの区別なく、音楽を通して社会に尽くし、果たさねばならぬ事の多さ、重大さを痛感するものです。

近ごろ合唱運動が盛んになる反面、一部の指揮者、指導者、合唱団の、対外的マナーの悪さ、幼稚さ、非社会性は目に余るものがありますが、今回の片野さんや出演団体の皆さんは、運営全般に関して心のゆき届いた、立派なマナーでした。日常の諸事に心をこめずして、何の合唱ですか、何の音楽ですか。これは大切なことです。

“146”の皆さんと、このステージで協演できることを、私は心から幸せに思っております。

このコンサートが、音楽を、人間を、自然を限りなく愛し敬う人々の、心の広場となることを祈りつつ――。



## 作曲家 萩原英彦

幾年前にコーロ・ファンタジアという団体が、私の編んだ“ふるさとのうた”という曲集のうちの数曲をうたったことがあった。

その透明な音色感と音楽の躍動に好ましい気もちで、目をプログラムに向けるとそこには片野秀俊氏の名が記してあった。

片野氏は、日本合唱協会の有力メンバーの一人であったし、現在は、日本合唱協会の主宰そして指揮者として重責を果す立場にあり、その指導力に格別の期待がもたれている。

はじめに記した私の記憶は、その指導力が並のものではないことの例証であり、また本日片野氏を総帥とする 200人の合唱愛好家の繰りひろげる祭典に、大きな成果がもたらされるであろうことは当然の予測と考えることができよう。

私が、合唱界と関りをもつようになってから随分と長い年月が経ち、その状況も大きく変化をしてきた。しかし、合唱振興という運動が、多勢をもって他を威圧するという政治闘争にも似た気配の中に、真の音楽愛好者を封圧してしまうような一面に懸念を感じるのである。良き指導者の資格は、先づ音楽を全身に溢れさせる存在としての人間である。

それは、技術や政治力を頼みとするものでなく、音楽を人間性の問題として把握することのできる才量である。

おそらく、このような論議を重ねてゆくならば、問題は漠然としたものになってしまうかも知れないが、私はことばの問題に焦点を絞り込むことこそ合唱人に与えられた急務であると考えている。

片野秀俊氏には、この急務をまのあたりにして良き解決を果してくれる才量をもった類い稀な人物の一人と信じている。

演奏会の盛会と御成功を祈りつつ。

(le 6 Janvier 1986)

# ●プログラム●

○合同演奏—————よろこびの歌 近江靖子 作詩  
ピアノ=高屋浩子 混声合唱曲集「アカペラの響き」より 湯山 昭 作曲

○登戸混声合唱団—————混声合唱組曲「わたしの季節」 中村千栄子 作詩  
湯山 昭 作曲

春の誕生  
夏の嵐  
こんなに秋の晴れた日は  
雪の夜の思い出

○女声合唱団コーロ・ファンタジア—————文部省唱歌による「ふるさとのうた」より 萩原英彦 編曲  
ピアノ=古川佳園

摘み草 作詩者不詳・長谷川良夫 作曲  
紅葉 高野辰之 作詩・岡野貞一 作曲  
螢 井上越 作詩・下総皖一 作曲  
冬の夜 文部省唱歌

○ひびき混声合唱団—————混声合唱組曲「海鳥の詩」<sup>うた</sup>より 更科源蔵 作詩  
ピアノ=古川佳園 広瀬量平 作曲

オロロン鳥  
エトピリカ  
北の海鳥

○女声合同演奏—————女声合唱曲集「落葉松」より 小林秀雄 作曲  
ピアノ=小林秀雄  
《特別出演》

飛驒高原の早春<sup>はる</sup> 岩間 純 作詩  
あなたとわたしと花たちと 峯 陽 作詩  
落葉松 野上 彰 作詩

————— 休 憩 —————

○混声合唱団「四季」—————Deutsche Messe F. シューベルト 作曲  
ピアノ=長沢恵美子 「ドイツ・ミサ」より

Zum Gloria (栄光の讃歌)  
Nach der Wandlung (化体の後)  
Das Gebet des Herrn (主の祈り)

○男声合唱団「秀声会」—————多田武彦作品集 多田武彦 作曲

春を待つ 伊藤 整 作詩  
四十雀 中 勘助 作詩  
年の別れ 堀口大学 作詩

○ルンビニー混声合唱団—————混声合唱曲集「六つの子守歌」より 別役 実 作詩  
ピアノ=長沢恵美子 池辺晋一郎 作曲

風の子守歌  
空と海の子守歌  
いつもの子守歌

混声合唱曲集「三つの不思議な仕事」より 池澤 夏樹 作詩  
池辺晋一郎 作曲

空みがき

————— 休 憩 —————

○女声合唱団こーろ・えれがんつあ—————北野実編曲によるスキヤット J.S.バッハ 作曲  
ピアノ=八尋利恵 北野 実 編曲  
ドラムス=坂本 優 ガボット 八尋利恵 補作  
ベース=鈴木 純 シチリアーノ

○コーロ・ファミリエ合唱団—————マドリガル G. フォーレ 作曲  
ピアノ=高屋浩子 (Madrigal)  
ラシーヌの雅歌  
(Cantique de Jean Racine)

○合同演奏 (出場団体全員) ————— 2台のピアノ伴奏による混声合唱組曲「筑後川」  
ピアノ=古川佳園 《日本初演》  
和田令子

丸山 豊 作詩  
團 伊玖磨 作曲  
高嶋みどり 編曲  
みなかみ  
ダムにて  
銀の魚  
川の祭  
河口

◆合同演奏 —「よろこびの歌」 〈湯山 昭・作曲／近江靖子・作詩〉

この曲は、湯山昭作曲、無伴奏混声合唱曲集「アカペラの響き」の中の曲で、本来は、無伴奏の曲だが、その時の状況でピアノ伴奏でも歌えるようになっている。1967年に作曲され、東洋大学合唱団に贈られた。

◇登戸混声合唱団

登戸混声合唱団は、数年前、登戸附近に住む有志によって作られた合唱団で、団員数はまだ少なく現在25名程ですが、人数が少いことが、かえって一人一人の自覚や責任感を芽ばえさせ、又親密度も高まって、暖い雰囲気を作っています。ただ残念なことには、男性が少ないため、バランスの問題や、選曲が限定されるということ等もありますので、男性の入団を切に望んでいるところです。

ステージの経験はまだ浅く、毎年行われる地元の多摩区民祭に三回出場しただけで、ジョイントコンサートに団としてステージを持つのは今回が初めてです。

団員の大半は小田急線・南武線沿線に住み、女性もほとんど仕事をもった人達です。火曜日の夜、小田急線向ヶ丘遊園の多摩市民館で練習をしています。



練習日／毎週火曜日 7:00pm～9:00pm

練習場／川崎市多摩市民館

(小田急線・向ヶ丘遊園駅)

「わたしの季節」 〈湯山昭・作曲／中村千栄子・作詩〉

「わたしの季節」は、春夏秋冬をテーマにした四曲によって構成されていますが、これらの四曲はもともと組曲として作曲されたものではなく、「夏の嵐」と「雪の夜の思い出」は1965年に、「春の誕生」と「こんなに秋の晴れた日は」は1966年に、それぞれピースで発表されています。

これらの曲を作曲家湯山昭の無伴奏混声合唱曲集「アカペラの響き」に収録するに当たり、かなり大幅な改訂がほどこされ、季節感を軸にして配列された新しい装いの合唱曲として誕生したものです。

この曲は、合唱の醍醐味は無伴奏で歌われるものにあるという作曲者が、特別な声の技術が必要としないで、いつ、どこでも、きがるに歌える合唱曲の必要を感じて作曲した無伴奏混声合唱曲です。

◇女声合唱団コーロ・ファンタジア

1981年4月 陽春の光に祝福され乍ら誕生しました。メンタルなハーモニーの創造を信条となさる片野先生の命名です。発足当時はメンバー13名でしたが、今日まで互に励まし合いひたすらに歩んで参りました。時折不協和音を発する事もありますが、初心を忘れることなく現在に至って居ります。

只今の在籍者は主婦ばかり47名を数え、本日は、家族の深い理解のもとに多数参加出来ます事をこの上なく嬉しく思っています。

昨年春の朝日「お母さんコーラス大会」では、幸運にもマーガレット賞を戴きましたが、これもひとえに片野先生の卓越した指導力と寛容なお心に支えられての事です。

これからもさわやかで明るい、ファンタスティックな愛に満ちたハーモニーをめざして歌い続けて参ります。

「ふるさとのうた」 〈萩原英彦・編曲〉

「ふるさとのうた」は一般に小学唱歌または文部省唱歌と呼ばれる一連の作品群の中から特に女声合唱のために萩原英彦氏が採りあげて編曲されたものです。文部省は明治維新を契機に新しい音楽の普及に情熱を傾け、当時西洋音楽を学んだばかりの先人たちがその技法を使って日本語の歌詞に作曲をしたものであり日本人の手で最初に創作された洋楽と云えるのではないのでしょうか。日本歌曲のふるさとである文部省唱歌に萩原英彦氏が一曲ごとに丹念にその曲に最もふさわしい編曲を施し装いを新たにしました。懐かしく美しいふるさとを心よみがえらせることを期待しつつ――。



練習日／毎週火曜日 10:00am～12:00pm

練習場／川崎市多摩市民館

(小田急線・向ヶ丘遊園駅)

## ◇ひびき混声合唱団

私たちの合唱団「ひびき」は、下は学生、上はン歳(?)まで、実に幅広い年齢層を持っています。でも年齢差によるギャップなどは、みじんも感じられません。練習では真剣さの中にもなごやかな雰囲気、練習後には明るい笑い声が絶えません。というのも、みんな個性的な人ばかりなのに「歌が好き、話が好き、人間が好き」ということで結ばれているからだと思います。片野先生も、とてもきさくに会話に加わってくださり、笑いの提供者として重要な一員でもあります。

昨年5月には、第3回定期演奏会を行ない、9月の都民合唱コンクールでは、念願の入賞を果たしました。今年はこのアミーチ・デル・カントに参加、また来年には、4回目の定期演奏会を予定しております。ますます意気盛んな「ひびき」です。これからも片野先生を中心として、心と歌声をひびかせ、頑張っていきたいと思っています。



練習日／毎週土曜日 6:00pm~9:00pm

練習場／代々木青年館・他

(小田急線・参宮橋、国電・代々木駅)

### 混声合唱組曲「海鳥の詩」 〈広瀬量平・作曲／更科源蔵・作詩〉

『海鳥の詩』これは、詩人であり、また北海道の郷土史家でもある更科源蔵氏が、昭和27年に出版した第三詩集『無明』からの二篇の詩『オロロン鳥』『海鷗』に、新たに書きおろしの二篇『エトピリカ』『北の海鳥』を加えて、昭和52年に広瀬量平氏が作曲し、四曲からなる組曲としてまとめたものである。これらの詩の中で歌われているのは、全て北海道に棲んでいる海の鳥であるが、その奥には辺境の厳しい自然に耐えて生きねばならぬ者たちの哀感と生の躍動が、海鳥の姿を借りて壮重に、高貴に描かれている。南の彼方へ思いをはせながら海を見るオロロン鳥、りんりと鳴る風の中をまっしぐらに飛ぶエトピリカ、鉛色にうねる寒流の中でじっと風や潮騒をきく海鷗。風と吹雪と氷雪の、荒く厳しい風土と戦う人々の姿が、きらめく海を力一杯飛びつづけるこれら北の海鳥を通じて、我々の心をじかに打つのである。

尚、更科源蔵氏は、昨年秋に御逝去されました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

**オロロン鳥**——ウミスズメ科の鳥で、和名はウミガラス。鳴声がオロロン・オロロンと聞こえるところからオロロン鳥と呼ばれている。ペンギンのように立ったような姿勢で歩く。

**エトピリカ**——ウミスズメ科の鳥。全体は黒色、嘴と足は朱赤色、目の上方から生えている長い冠毛は淡黄色と美しい鳥である。

## ◆女声合同演奏 (女声合唱団こーろ・えれがんつあ、女声合唱団コーロ・ファンタジア)

### 女声合唱曲集「落葉松」より 〈小林秀雄・作曲〉

「明るい、わかりやすい音楽を、正格な技術で演奏する。内容や心は、それに乗って滲みでてくる」。という作曲者のメッセージで始まるこの曲集より三曲を演奏します。

どの曲も明るく、美しく、のびやかで楽しいのですが、唱っているうちに、「わかりやすい音楽を正格な技術で」ということが案外難しいことで、ややもすると「正格な技術」が無いのを忘れて「心」ばかりくっつけようとしていることに気づかされる曲のような気がしてくるのです。

●「飛騨高原の早春」〈岩間純・作詩〉 1971年、独唱曲として完成。1977年に女声合唱化したもの。曲はロンド形式をとっている。「ロンド形式」とは一言でいうならば「モトになるメロディー(主題)が、間に別のメロディーをはさみながら何回かくり返される形式」であり、ここでは詩の冒頭の2行に付されたメロディーが、主題として何回も現れる。

●「あなたとわたしと花たちと」〈峯陽・作詩〉 1976年の作品。フォークソング調のこの曲は、ある若いカップルの結婚を祝って作られた「門出のうた」である。同時にまた「春のうた」でもあり、あくまでも明るくのびやかに、生命のリズムを輝やかせて唱和されたい。四節からなる詩を、ABAという3部形式にまとめ、その全体を反復する。反復で曲想はもり上り、各パートは対位的に交錯して展開する。

●「落葉松」〈野上彰・作詩〉 1972年に独唱曲として完成。1976年に女声合唱化したもの。

才気煥発、多才であった野上氏の詩には、昇華された透明な、みずみずしい世界がある。センチメンタルに陥らぬ、起伏の明瞭な演奏が望ましい。曲は、詩全体をA・A'・B・Aの2部形式にのせ、ピアノの間奏を挟みつつ後半のB・Aを反復して終わる。

## ◇混声合唱団「四季」

心の底に静かに生きている歌をいつまでも歌い続けたいという願いから早12年、今回の出場団体の中でも一番古くから指導いただいている合唱団です。そんな一メンバーの思いを紹介にかえて――

子供のころの記憶は、いつ、何をやったのか実に鮮明である。でも大人になってからの、一体何年前だったのか区別もできない感性みたいなものが弱まってくるからだろうか、そのうち何十年かがごっちゃごちゃになりながら年を取っていくんだらうな、とは達観してみてもなんとなく寂しい気もする。

でも幸いにも、ぼくの大人になってからの記憶には四季があり、そしてそのすべてが、四季に収斂しているような気がする。なにより集まりそして去っていった仲間一人一人との出会いは、ぼくにあって至上のものだ。

それに、考えてみれば未来にも記憶を刻める訳だ。これからどの位か、ぼくと四季、お互いにタフな記憶を刻み合えれば最高だ。

閑話休題、この夏、7月20日(日)に白山のバリオホールで定演を行います。



練習日／毎週木曜 6:30pm～9:00pm

練習場／駒込社会教育会館

(国電・駒込駅)

## 「ドイツ・ミサ」〈F. シューベルト・作曲〉

ミサ曲は本来、ラテン語の固有文を持つが、宗教改革以後プロテスタント教会は、自国語の礼拝用語を持つようになり、この曲のような独自の礼拝音楽が育成し、発展した。

この「ドイツ・ミサ」はウィーン工業研究所の学生たちが歌うために作曲されたものであって、きわめて平易な手法により書かれているが、シューベルトの旋律的な魅力と円滑な和音進行は、聞くものと歌うものの心を捉えて離さない。

全9曲より3曲を抜粋。

## ◇男声合唱団「秀声会」

私共、男声合唱団「秀声会」は、57年12月に、このアミーチに所属する混声合唱団の男性が集まり発足しました。そして、59年3月に、新宿モーツァルトサロンに於いて、第1回演奏会を開き、その年の10月は、世田谷合唱祭出場、60年9月には、都民合唱コンクール出場と、活動して参りました。

私共の合唱団は、毎月、第1、第3水曜日と1回、日曜日に練習していますが、社会の中堅として活躍している超多忙男性の集まりなので、皆、時間を作るのに苦勞しています。しかし、少人数ながらも、皆で声を合わせ、より良いハーモニーを求めて努力しています。

今回のアミーチでは、一番若い合唱団ですが、皆といっしょに歌える事を光榮に思っています。現在、団員を募集していますので、是非一度、練習場にいらして下さい。



練習日／毎月第1、3水曜日、日曜日

7:00pm～9:30pm

練習場／あさひ幼稚園

(国電・大塚駅より都電・新庚申塚駅)

## 「春を待つ」〈多田武彦・作曲／伊藤整・作詩〉

男声合唱組曲「雪明りの路」の第1曲であり、この組曲は、伊藤整の同名の詩集より6篇を選んで作曲されたものである。伊藤整の故郷である北海道、小樽近郊の自然を背景に、彼が16歳の時から6年間にわたり書かれたものである。

## 「四十雀」〈多田武彦・作曲／中勸助・作詩〉

昭和33年に作曲された男声合唱組曲「中勸助の詩から」の第3曲で、中勸助の詩集「銀の匙」から選ばれたものである。東京神田生まれの中勸助の詩に、関西生まれの多田武彦の独特なメロディーがよくマッチして、時々アクセントが違うのではないかと思われる箇所も気にならず、美しく聞こえるのが不思議である。

## 「年の別れ」〈多田武彦・作曲／堀口大学・作詩〉

男声合唱組曲「人間の歌」の第6曲で、この組曲は、堀口大学の詩集「人間の歌」より6篇を選んで多田武彦が昭和35年に作曲したものである。大学の詩には、孤独感を表現したものはいくらかもあるが、哀傷の痛切さや、刺しこむ様々な絶望感といったものがない。詩の中に人生を遊び、そうすることによって歩き続けた詩人である。

## ◇ルンビニー混声合唱団

私たちの練習場所は、あのフーテンの寅さんで有名な柴又帝釈天の中にある鳳翔会館のホールです。53年10月に合唱を愛される住職様が、「帝釈天出現200年記念の法要」において「インドラ讃歌」を合唱するためにメンバーをお集めになりました。54年4月、法要も無事に終わり解散ということになりましたが、2～3人の熱心なメンバーが残り、住職様をお願いして付属の合唱団として発足しました。55年11月、初めて葛飾区民文化祭に出場して以来、都民合唱コンクール、東京都合唱連盟主催の合唱祭などに出場して、研鑽を積んでまいりました。

片野先生曰く、一下町の良さも悪さも合わせ持った合唱団一ですが、良い方を伸ばしてゆきたいと思っています。

「六つの子守歌」〈池辺晋一郎・作曲／別役実・作詩〉「三つの不思議な仕事」〈池澤夏樹・作詩〉

池辺晋一郎氏の1970年代の作品から4曲。子守歌は「六つの子守歌」として曲集に収められたものの中の3曲で、著名な劇作家であり詩人でもある別役実氏の詩に、はじめ歌曲として美しい旋律を付し、後年これを合唱曲としてアレンジしたもの。最後の曲は「三つの不思議な仕事」という連作の中の曲で、作曲者も「エーゲ海の空と海のようなのびやかさがこの曲の底に流れてほしい」と語っているように明るく軽いタッチの合唱曲。



練習日／毎週金曜日 6:30pm～9:00pm

練習場／柴又帝釈天ホール

(京成線・柴又駅、国電・金町駅)

## ◇女声合唱団こゝろ・えれがんつあ

昭和54年結成。56年、都民合唱コンクール出場（東京文化会館大ホール）奨励賞受賞。TBSテレビ、文化放送出演。

57年、宮城まり子チャリティーショーに、ねむの木学園の子供たちと出演（厚生年金大ホール）。58年、全国お母さんコーラス東京支部大会出場。総理府主催「障害者の集い」チャリティーコンサート出演（日経ホール）59年、都民合唱コンクール出場（東京文化会館大ホール）第4位入賞。第3回定期演奏会（abcホール）。60年、全国お母さんコーラス東京支部大会入賞。都代表として全国大会出場（大阪フェスティバルホール）。豊島区合唱大会に毎年出場。

以上が結成以来の主な活動です。年数のわりには豊かな経験と大きな舞台に恵まれ、感謝しております。今回は新たな試みとしてジャズバンド伴奏によるスキヤットを演奏致します。長年主婦の座にデンと坐るうちに、ヒップ同様リズムも重くなりましたのを、若きジャズメン+ウーマンに助けられ、せめてリズムなりとも軽やかに…との願いをこめて唱います。女声合唱とジャズとの出会いが Happy でありますように……。



練習日／毎週金曜日 10:00am～12:00pm

練習場／駒込社会教育会館・大塚社会教育会館

(国電・駒込駅、大塚駅)

ガボット(gavotte) 〈J. S. Bach作曲／北野実・編曲／八尋利恵・補作〉

17世紀フランスの舞曲。中庸のテンポで2拍子、4分音符二つの上拍をもち（初期のものは無い場合もある）フレーズは、ふつう小節の中央で始まり、また終る。J. S. バッハはしばしば管弦楽、鍵盤楽器の組曲に採用していた。本曲はJ. S. バッハの無伴奏バイオリンの為のパーティータ第3番ガボット E-dur を編曲したもの。

シチリアーノ(siciliano)

17、8世紀シチリア起源のダンス。中庸の速さの3拍子が6拍子で、分散和音で伴奏される。旋律は、多くは付点リズムで奏される抒情的なものである。コレルリやバッハなどのソナタにも緩徐楽章として用いられている。本曲はJ. S. バッハのフルートソナタ d-moll を編曲したもの。これらの2曲は新進気鋭の作曲家、北野実氏の手によるものである。

《演奏》ピアノ／八尋利恵・ドラムス／坂本優・ベース／鈴木純

二年もの地下活動に終止符を打ち、今ここに再びその勇姿を現したのは八尋利恵トリオだ。

派手さはないが、タイトなリズムをキープする坂本 優、ふらつく音程をグリスサウンドとして巧みに利用する鈴木純、そして、複雑なアレンジを施しコーラス部隊を恐怖のどん底に陥れるリーダー八尋利恵。

青山学院大学ジャズ研出身の3人が、女声コーラスを相手にいかに闘うか、引っぱるか、乗らせるか、結末はあなたしか見れない。

## ◇コーロ・ファミリエ合唱団

9年前の3月、母体であったアマトルフィラルモニー合唱団より我が団が誕生しました。家族のような心のつながりのあるハーモニーを求めようと「ファミリエ」の名がつけられました。できるだけ多くの発表の場を得ようと活動を続け、定期演奏会6回、小コンサート3回の機会を今日までに持つことができました。昭和55年には片野秀俊先生を常任指揮者としてお迎えしより高い音を求めるようになりました。又、昭和57年には先生の推薦もあって都民合唱コンクールに初めて参加し「努力賞」を受賞、以後58年「第4位」59年には思いもかけない「第1位」を獲得することができました。そして昨年60年では、今までにない多くの観客を前にしての都民合唱コンクール招待演奏。定期演奏会を犠牲にして、1年間一曲にかけてきただけに感動のステージとなりました。本日は初めてフォーレに挑戦します。少しでも良い音が出せるよう努力致します。



練習日/毎週月曜日 7:30pm~9:30pm

練習場/中野教会(上の原幼稚園)

(中央線東中野駅)

## マドリガル(Madrigal Op.35)

混声4部合唱(又は4重唱)のために書かれたアルマン・シルヴェストルの詩によるこの佳品は、J. S. バッハをはじめ多くの作曲家によって、しばしば引用されている著名なグレゴリオ聖歌ミサの旅律が、主要主題をかたちづけている。

## ラシーヌの雅歌(Cantique de Jean Racine Op.11)

ジャン・ラシーヌの晩年の詩篇をテキストとしたフォーレの初期の名作。低声部から高声部にむかって逐次導入されていく声部重畳・累積は、合唱作品の冒頭部を飾る多声部書式の典型である。なお、オルガン、ハルモニウム、弦楽合奏、小管弦楽用の伴奏のための版も用意されている。

## ◆合同演奏 — 2台のピアノによる混声合唱組曲「筑後川」 《日本初演》

〈團伊玖磨・作曲/高嶋みどり・編曲/丸山豊・作詩〉

この組曲は、九州の久留米音協合唱団の定期演奏会のために作曲された曲である。

久留米は、ブリジストンタイヤの本拠地であり、ブリジストンタイヤの石橋家と姻戚関係にあたる團伊玖磨氏は、久留米在住の詩人、丸山 豊氏とブリジストン社歌や、久留米大学校歌などを作曲している。ブリヂストンは、昭和38年、音楽鑑賞団体として久留米音楽協会(久留米音協)を創り、翌年、音協の自主活動団体として、久留米音協合唱団が発足した。この久留米音協合唱団が創立5周年を迎えるにあたり、ブリヂストンの石橋幹一郎氏を通して、團伊玖磨氏に依頼して作られたのがこの合唱組曲「筑後川」で、昭和43年12月、久留米音協合唱団により、石橋文化ホールに於いて、作曲家自身の指揮で初演されたのである。そして、本日の「筑後川」は、高嶋みどり氏にお願いして2台のピアノ伴奏用に編曲していただき、日本初の演奏となる。

## ■第2回アミーチ・デル・カント≡146実行委員会

- |                   |                |               |
|-------------------|----------------|---------------|
| ●委員長 佐野文男(ひびき)    | ●副委員長 望月裕子(四季) | ●会計 染谷明子(ひびき) |
| ■委員 鈴木なるみ(えれがんつあ) | 高松 昭一(登戸)      |               |
| 鈴木 朝子(えれがんつあ)     | 根村 道子(登戸)      |               |
| 箱崎 佳子(ファンタジア)     | 友永 朗(秀声会)      |               |
| 吉田 朋子(ファンタジア)     | 長嶋 勝(秀声会)      |               |
| 青木 輝夫(ルンビニー)      | 滝口 義彦(ファミリエ)   |               |
| 青木 寿実(ルンビニー)      | 大和 清子(ファミリエ)   |               |

■デザイン/裾沢清次郎 ■ステージマネージャー/大山恵孝

**団員募集!!**

あなたもアミーチの仲間とっしょに歌いませんか!!

連絡先 ●女声合唱団コーロ・えれがんつあ  
鈴木なるみ ☎03(916)0716  
●女声合唱団コーロ・ファンタジア  
吉田 朋子 ☎044(955)6707  
●登戸混声合唱団  
西田小夜子 ☎044(955)6573  
●ひびき混声合唱団  
永井 雅子 ☎03(392)2334

●ルンビニー混声合唱団  
青木 輝夫 ☎03(694)2715  
●混声合唱団「四季」  
江原 明子 ☎03(951)8595  
●コーロ・ファミリエ合唱団  
平 義幸 ☎03(484)3412  
●男声合唱団「秀声会」  
柴 三義 ☎03(376)4711